『西南アジア研究』No.48, 1998

Sino-Iranica

吉田　豊

はじめに

伊藤義教先生はかつて『ペルシア文化渡来考』(東京, 1980)のなかで,『日本書紀』のなかに現れるいくつかの語を, イラン語, とりわけ中世ペルシア語で解こうとされたことがある。奈良朝以前の日本にイラン人あるいはペルシア人が来たかどうかが既に大問題であるので, それを前提にして行われる議論は, 仮説に基づく仮説ということになり, 厳しい批判の対象ともなったことは記憶に新しい[1)]。

一方唐代以前の中国にイラン人, 特にソグド人が多く来ていたことはよく知られている。さらにササン朝ペルシアから来た人々がいたこともまた事実である。イラン語圏から中国に入った文物の中国に於ける受容の様子, 及び漢字で表記された原語の形式に関しては, Laufer の名著 *Sino-Iranica* があり, 現在に至るまでそれを越える研究は発表されていない [Laufer 1919]。この研究はしかし, 中古漢語の再構形についての知識がまだ十分ではなかった時代になされており, 原語の形式に関する議論や比定には改善できる部分が少なからずあると思われる[2)]。

彼に続く研究者の使命は, 彼が集めたもの以外の形式を探すことと, 新しい中古漢語の知識を利用して, 彼の比定の誤りを訂正することであろう。本稿の目的は Laufer が扱わなかったものも含めて, いくつかの漢字で表記された中世イラン語の形式について, 原語の比定を試みることである。この種の作業は長い目で見れば, *Sino-Iranica* の改訂版の準備作業と見なすことができ, 本稿のタイトルはそのことを意識している。しかしながら, その仕事を完成するためには, 優秀な中国語学者とイラン学者による地道な共同研究が必要で, とうてい筆者のような研究者一人の手に負えるものではない。名著のタイトルを冒す暴挙に対して, 大方の寛恕を請う次第である。

1　ササン朝ペルシアの官名

神亀元年(518)に波斯国から北魏に朝貢があり, この時に得られた情報に基づいて,『魏書』巻102「西域伝」波斯国之条が書かれた。したがってここに見える記事は非常に正確でササン朝の歴史を考える上でも貴重な史料となっている[3)]。とりわけ興味深いのは, ここに記載されたササン朝の官名の音写である。この名称を原語に還元する試みは Laufer によってなさ

れている。その後，佐藤圭四郎もこの記事を取り上げ，官名の比定を試みた。1983年には P. Daffina が，1991年には P. O. Skjaervø が，これらの原語のリストを発表した[Laufer 1919 : 529-534 ; 佐藤1975 ; Daffina 1983 : 155-159 ; Skjaervø 1991 : 449-452[4)]]。それらのなかでは地卑勃[5)](掌文書及衆務) d'i pjie b'uət が dibīrbed「書記長」，薛波勃(掌四方兵馬) si̯ät puâ b'uət が spāhbed「将軍」に当たることが確認されている。これ以外の称号の原語については，多少とも意見の相違がある。ここではそれらの中でも，王族の称号についてこれら 4 人の研究者の説を見てみる。

①医囋'i dz'ât＝王 : L. ixšēδ ; 佐藤 pātixšāh の不完全な音写; D. yazd ; S. ?

②防歩率 b'i̯wang b'uo si̯uĕt＝妃 : L. bānbušn, bānbišn ; 佐藤 bānbišn ; D. bāmbušt ; S. bāmbušt

③殺野 si̯ät i̯a＝王之諸子 : L. xšaθrya ; 佐藤 šahryār ; D. šāh ; S. šāh

①では Daffina の説が採用されるべきであろう。この場合に問題になるのは囋の音である。2 つの読みがあって，中古漢語では dz'ât 及び dz'ân のように再構される。Skjaervø は dz'ân の読みを採用して，原語は不明だと考えた。しかしもっとも一般的な音である dz'ât を採用すれば，'i dz'ât は中世ペルシア語の yazad「神，神格」の当時の発音を音写したものとしてふさわしい。従来この語は[yazd]と転写されてきたが，[yazad]と転写すべきであることが最近になって指摘されている。また近世ペルシア語の形式は īzad であり，中世ペルシア語の yazad から変化したことを想定させる。実際この同じ語は，8 世紀に漢訳されたマニ教文献では夷薩 i sât と音写されており，既に中世語の段階で近世ペルシア語の īzad に近い発音であったことが分かっている[6)]。

特筆すべきは，ササン朝の王が「神」を意味する語で呼ばれていた(国人号王曰医囋)ことであろう。ササン朝初期の碑文やコインの銘文から，当時の王が mzdysn bgy「マズダ教の神(bgy)」と呼ばれていたことは知られていた。彼らはまた MNW ctry MN yzt'n「その血筋が神々(yzt'n)に由来する者」とも言われていたが，彼らが yzdty [yazad]そのものであると呼ばれることは知られていなかった[7)]。この史料は従って 5 世紀にササンの王を人々が「神(yazad)」と呼んでいたことを示す貴重な証拠である。

②で興味深いのは，防歩率が中世ペルシア語の形式 bāmbišn ではなく，ソグド語に借用された形式である p'mpwšt [bāmbušt]と同じ発音を音写していることである[8)]。Daffina によれば，これは朝貢に際してソグド人が介在したことを示すものであるという。それは大いにありそうなことではあるが，一方で中世ペルシア語の接尾辞の -išn は，ペルシア語内部でも方言レベルでは -išt と発音されていたことが知られており，必ずしもソグド人の仲介を前提にする必要がない[9)]。

③を原語に還元することは容易ではない。筆者は佐藤の説が正しいと考える。Laufer の xšaθrya は古代イラン語の形式であり，この形式で中世語まで残ったとは考えられない。ちなみに xšāθrya に由来する形式は xār ないしは šēr という形でバクトリア語の文献に現れて

いる[Sims-Williams 1996a : 645]。šāh の音写と考えるには野が不要であり，なにか別の要素を写したものに違いない。漢字の音写形は šarya, šadya のような原語を想定させ，確かに野は yār の音写としては理想的ではない。しかし一方で*yat と再構成できるような漢字がなければ，理想的な音写にはなり得ず，そのような漢字がない状況で近似的な音写が意図されたと考えるべきであろう。šahryār はササン朝を構成する各国(šahr)の長であり，王族から任命されていた。従って王子が šahryār と呼ばれることには全く問題がない[Lukonin 1983 : 700-701]。

2　バクトリア語

地名

バクトリア語の文書は最近になって発見され，現在その解読が進行中である。現在なおその全貌は明らかにされていないが，解読にあたっている Sims-Williams は文書の簡単な紹介を発表している[Sims-Williams 1996a ; シムズ＝ウイリアムズ 1997]。ここではそこに報告されたバクトリア語の地名3点について，対応する漢字音の表記を比定するとともに，それが持つ問題点を論じる[10]。

Sims-Williams によれば，これらは4世紀から8世紀にかけての文書であるといい，そこには地名も含まれている。玄奘は7世紀のはじめにこの地域を通過してインドと中国を往復しており，彼もまたいくつかの地名をあげている。彼が音写した地名は，バクトリア語の文献にも現れ，我々は両者を比較することができる。そしてそれによって玄奘が原語をどれくらい正確に(あるいは不正確に)音写したかも分かる。もっとも印象的な例は掲職(国) g'i̯ät tśi̯ək である。これは従来バルフの南東にある Gaz に比定されている[11]。しかしそれが正しいとすれば，玄奘の通例に反して著しく不正確な音写になってしまい，この比定には無理があると考えていた。筆者自身はぼんやりと，掲職はソグド語の γrcyk「山の」とよく似ている思っていた。

ところでバクトリア語に γαρσιγοσταυο という地名があり，Sims-Williams は γαρσιγο をソグド語の γrcyk と同様 *gari-čiyaka- に由来するとしている。そしてバーミヤーンの西の山岳地帯の名称である Gharchistan はこのバクトリア語と同じ地名だとしている。さらに原義が「山の国」であるこの語は，バクトリア語の文書に「τοχοαραστανο(トカリスタン)と γαρσιγοσταυο の判事」という表現の中に現れるので，この文脈から γαρσιγοσταυο は現在のそれとは異なり，当時はトカリスタンの南にある山岳地帯全般を指す名称ではなかったかとしている[12]。玄奘は掲職国を覩貨邏国南境であるとしており，Sims-Williams の Gharchistan に関する推測と一致している。このことを考慮すれば，『大唐西域記』の掲職がバクトリア語の γαρσιγο- に対応していることは明らかである。ただし玄奘がバルフから南に向かって，バーミヤーンに入る直前に掲職を通過していることから，やは

りかなり西よりの位置にあることは否めない。

言語の研究からはギリシャ文字で表記されたバクトリア語の音価を，漢字音写から推定できることが重要である。特にギリシャ文字のシグマ(σ)で表記された音が，[č]とも発音されていたことは興味深い。バクトリア語においてシグマで表記される音の由来と音価に関しては，Henning による注釈も参考になる[Henning 1960 : 48-49]。彼はシグマは摩擦音[s]だけでなく破擦音[ts]も表していたと推定したが，破擦音も表記するとする彼の説は漢字音表記からも確認される。しかし音価の違い([č]と[ts])は説明できない。今の所この違いが，漢字音のレパートリーの限界(つまり tsik を正確に音写できる漢字がない)によるものか，我々が知っているバクトリア語とは異なる方言の発音を表したものかは判断できない。地名に見られる方言の要素については次の項も参照せよ。

Sims-Williams によればバクトリア暦の379年(西暦611年？)の文書に，地名として οαρνο が現れる。これは *Warn と読まれるが，彼はこの地名から派生した形容詞に (ο)οαρνοοαγγο, οαρνοοιγο があることから，接尾辞が付加されると古い -u- が現れるとしている。また子音の連続 -rn- の存在から，この地名は純粋のバクトリア語形ではないとしている。そして純粋なバクトリア語形としては -rn- が -r(r)- に変化した形式が推定され，実際この形式が葡萄畑の名前である οαραοαγγο に反映されていると考えている。さらにこの地名を彼はアリアーノスが伝える Ἄορνος，すなわちクンドゥズに比定し，その古名である Warwāliz をバクトリア語の *War(a)wā(ng)-liz「Warnu の砦」にさかのぼるとしている[Sims-Williams 1996a : 646, n.13]。つまり，*Warn 以外に *War あるいは *War(ra)w- という地名が，純正のバクトリア語形として存在したと考えている。

このクンドゥズは一般に玄奘の活国 γuât に比定されている[水谷1971 : 374]。この比定を提案した Markwart によれば，活は Warwaliz の War に当たる。上で引用した Sims-Williams の議論から，Markwart の説は基本的には正しいことが分かる。つまりクンドゥズを指す War という地名がかつて存在し，玄奘はそれを写したことになる。数ある玄奘の音写語のなかでは，これだけが漢字1字によるものであるというが[桑山1986 : 144]，確かに活は war の音写として十分に正確である。さらに言えば，『梁書』「諸夷伝」の滑国 γwăt もこの同じ地名に対応するであろう。

ところで『両唐書』「地理志」には太汗都督府・嚈噠部落の所治として活路城 γuât luo が言及されている。これは活と名前が類似するので，同じ地名を指すのではないかと推測される。そして路が付加されていることから，Sims-Williams が想定した War(ra)w- のほうに対応するとみなすことができるだろう。

しかしこの比定には問題もある。Markwart 以来，玄奘の活は『唐書』「地理志」の月氏都督府の所治である阿緩城(『新唐書』)ˈâγuân・遏換城(『旧唐書』)ˈâtγuân とも同じ場所を指すと考えられているので，同じ「地理志」に現れた活路城は，活とは同じ地名になり得ないことになる[13]。筆者にはこの矛盾をどうのように解決したら良いか分からないが，桑山が玄奘の活(＝

阿緩)に比定したカライェ＝ザールはクンドゥズではなくてその50キロほど北西にある。阿緩がカライェ＝ザールで,活は活路と同じくクンドゥズを指すと考えれば矛盾はないかもしれない。ちなみにイスタフリーが Warwālīz と並んで言及するトカリスタンのまち Ārhan は,漢字の表記の遏換に非常によく似ている。このまちは,オクサス河の南にあったという[14][15]。

最後に闊悉多 k'uât si̯ĕt tâ について。これは現在の Khost に比定されている[水谷1971 : 374]。一方バクトリア暦で446年(西暦678年？)の契約文書に,奴隷の売り手の一人として現れるカウの息子のヤズデギルドは,出身地を表す形容詞の χοασταοιγο を伴っている。Sims-Williams はベースになっている地名を Khwastu であると考え Khost に比定した[16]。これは語末の -u を除けば,玄奘の表記とよく一致している。特に初頭の -wa- が,漢語の合口の声母によって正確に音写されている点は注目される。末尾の多は,サンスクリット化した語幹の母音を表記したものか,語末の -t を正確に表音するためのものであったかは判断が困難である。War の場合と同様に古い語幹の母音の -u は,単独では発音されなかったのだろう。

羅姓の人名

新しく発見されたバクトリア語の文書には多くの人名も現れる。これらの人名が漢字によって表記されていることがあれば興味深い。彼らバクトリア出身の人々が中国に来た場合,ソグド人の昭武姓に比較されるような固有の姓を持った可能性がある。実際池田温は,漢文史料に徴して,羅がバクトリアすなわち吐火羅国出身の人々の姓だと考えた[17]。トカラの音写形の最後の漢字が姓として使われたと考えたのである。彼の説の発表後に公刊されたトルファン出土の漢文文書には,羅姓以外に実際に吐火羅を姓とする人間が二人いる。それらは吐火羅磨色多と吐火羅拂延の2人である[18]。

羅姓の人名を敦煌及びトルファン出土の文献で調べてみると,多くの場合ソグド人と同じ名前である。例えば敦煌の従化郷の750年頃の差科簿に,羅伏帝延が見える[19]。この同じ文書で伏帝延 b'i̯əu tiei i̯än を名前とする人名には,他に安及び曹を姓とするものが知られている。この人名は実在するソグド語の人名 pwty'n「仏陀の恩恵」に対応するであろう[20]。同様に吐火羅を姓とする磨色多 muâ si̯ək tâ も,曹姓で同名の者が従化郷にいる。拂延 p'i̯uət i̯än のほうには,安西(クチャ)の差科簿に安拂延という人名が知られている[21]。また従化郷の羅勿沙 mi̯uət ṣa の場合は,この同じ漢字で表記されたソグド人名は知られていないが,ソグド語資料に実際に現れる人名 mwš'kk あるいは mwš' に対応するだろう[22]。ちなみに Mahrnāmag の奥書には,9世紀はじめの頃の西域北道のオアシス都市に住むマニ教徒の名前がリストされているが,そこにアルク(すなわち現在のカラシャール)在住の l'frn が現れる。漢字で音写された人名では,従化郷に羅拂那 p'i̯uət nâ が知られており,これは同じ名前の音写かもしれない[23]。

従って池田の考えが正しいとしても,漢字で音写された人名からは確実にバクトリア語的といえる要素を取り出すことはできていなかった。ソグド語の人名の要素として頻出する

-βntk「しもべ」に対応するバクトリア語は -μαρηγο で，これもやはり人名に頻出する。これの音写語がいまだに回収できないことなどは特に奇妙である[24]。

現在のところ多少ともバクトリア語的といえる人名で筆者に知られているのは，従化郷の羅達数番 d'â ṣiu p'i̯wan である。番はソグド語の frn「栄光」に対応する要素に違いない。バクトリア語でソグド語の frn に対応するのは φαρ(ρ)ο であるが，方言を異にする形式である φαρνο もあった[25] [Davary 1982 : 187]。達数のほうはバクトリア語の δαθþο(アヴェスタ語の daθušō「創造主の(単数属格形)」に由来する)の音写と考えられる。この要素は実際に δαθþο-μαρηγο「創造主(＝暦の月の8日の名称)のしもべ」という人名に現れている[Sims-Williams 1996a : 641]。これがバクトリア語的と考えられるのは，同じ語源の語を要素に持つソグド人の人名が別に知られていて，そこに見られる音写形が達数とはかなり異なるからである。その名前は曹提始潘 d'iei śi p'uân (『文書』3 /119) で，提始はソグド語の同源語 δ(y)šcy を写しているであろう[26]。この要素の -šc- の部分が不安定で，-š- あるいは -c- に変化しやすかったことは，同じ要素を含む人名 δšcy'pt「創造主に見守られた(者)」が，δš'pt あるいは δc'pt と表記される例があることからも知られる。ちなみにこの同じ名前は，『沙州図経』に康拂耽延の弟として言及される康地舎撥 d'i ṣia puât にも見られる。ここでも -c- の要素が見られないことは注目される[27]。また漢語の来母 l- によってソグド語の δ を写すことがあったとすると，従化郷の(米)離失 ljię śi̯ĕt も同じ要素を写したものかもしれない。実際に δyšcy という人名は知られている[28]。

Sims-Williams によれば『隋書』巻83「西域伝」漕国の項にある国王の順達は，*žūn-dād「(原義)ジュン神によって与えられた」を写したものであり，同じ名前はバクトリア語文書に ζονολαδο として現れるという [Sims-Williams 1996a : 648, n. 22]。漢文資料中には，羅姓で名前の中に順という文字を含むものが1つ知られている。それは従化郷の羅順陀 dź'i̯uĕn d'â である。この順が神の名前であるかどうかは，陀の部分がどのような形式に対応するか分からないので，今のところ不明である。

3 ソグド語

署名

漢字で表記されたソグド語の人名に関しては，筆者は前項でしたように，折に触れ想定される原語についての筆者のアイディアを発表してきた。ここでは少し変わった事例について扱うことにする。かつて筆者は漢文の契約文書の末尾に売り手のソグド人安忽娑がソグド文字で署名した例について論じ，署名は忽娑の原語であり xrys と読むべきであるとした[吉田 1989 : 70]。同じような例を，最近公刊されたトルファン出土文書の写真版(『吐魯番出土文書』肆. 北京, 1996 : 402) に見いだすことができる。そこでは安莫 mâk が署名しているが，彼は姓の安を漢字で書いてから，花押のようなものを書いている。文書編纂者はそれをほぼ正

確に写し取っている。最初の部分は確実にソグド文字の m と読むことができる。中間の漢字の「王」に見える部分はアリフ(')とヘース(x)と見なすことができる。最後の大きな湾曲は x の尻尾が独立したものだろう。従って全体を m'x と読むことができる。莫は確かに m'x を表記する文字なので,この読みは正しいと考えられる。

'βy'mn

ソグド語の人名には 'βy'mnβntk「(原義)アビヤーマンのしもべ」のように,'βy'mn を前分とするものがいくつか存在する。漢字で表記された名前にも現れ,(曹)浮夜門畔陀は正しく 'βy'mnβntk の音写である。この種の名前から 'βy'mn が神格の名前であることは明らかであり,その解釈に基づいた語源も Sims-Williams によって提案されている[29]。しかし現在までのところこの神格名が単独で現れたことがない。最近発表されたペンジケントの壁画には銘文が一部残っており,報告者である Marshak はその一つを,'ry'mn と読んだ[Marshak 1995/96 : 306]。しかし掲載された写真で見る限り -r- の部分は保存がそれほど良くない。さらに r と β は互いに似た文字でもあるので,この文字連続は 'βy'mn と読むことも十分可能である。一方で 'ry'mn の方は,マニ教ソグド語文献に現れるだけで,ゾロアスター教徒であった,普通のソグド人の人名の要素としては在証されていない。ペンジケントの壁画は,ゾロアスター教のソグド人によるものなので,その点からも 'βy'mn の読みが支持される。筆者の読みが正しければ,わずかに残された像はこの神格のものであるかもしれない。従来,壁画に描かれた神格を比定する際に,人名が考慮されることはなかった。しかしソグド人は,自分たちにポピュラーな神格にちなんで子どもを命名したに違いないので,今後この観点から壁画を見ていく必要があるのではないだろうか。

安禄山

漢字で表記したソグド人名でも最も頻繁に現れるものの一つは,(阿)禄山及びそのヴァリアントであろう[30]。有名な安禄山の名前でもあるこの要素は,Henning 以来ソグド語の rwxšn「明るい」に比定されてきた[Henning *apud* Pulleyblank 1955 : 15 with n. 37 on p. 111]。筆者もこの「定説」を受け入れてきた。ところで Henning がこの比定を提案してから,ムグ文書やインダス河上流の銘文群のように,ソグド文字で表記された人名が多数発見されている。しかし奇妙なことに想定された rwxšn は,これらのソグド語資料に一度も現れたことがない。'Ρωξάνη をはじめとして,ソグド語の rwxšn と同じ語源の語を含むイラン人の人名はいくつか知られているので[Justi 1895 : 262 ; Hinz 1975 : 202],ソグド語文献に現れないのは単なる偶然かもしれないが,この奇妙な状況は Henning の推定に再考の余地があることを示唆する。実在するソグド語の人名で漢字の表記に近いものは,rywxšy'n である。この名前は従化郷の(羅)阿了黒山 'â lieu xək ṣăn にみることができるので[31],(阿)禄山をその名前の音写と見なすことにも問題がある。(阿)禄山の原語の問題は,一般に考えられているほど簡単で

はないことは強調されるべきだと思う。

なお安禄山の一族の名前では父の安延偃 i̯ăn ˈi̯ân, 祖父の安逸偃 i̯et ˈi̯ɐn, 叔父の安波注 puâ tśi̯u がソグド語風の人名である。最初の2つに対しては Henning の提案があり, Pulleyblank によって引用されている。各々 Yānēn, Yazdēn と復元している。どちらもソグド文字資料には在証されていない名前であり, 正しい復元かどうかについて筆者は判断できない。波注のほうは Pulleyblank によれば, 中国名である。しかしソグド文字で書かれた資料に p'c という人名があり, 漢字音はその音写とみなして問題ないので, これもソグド名であろう[32]。

仏陀を表す要素

漢字で表記されたソグド人の人名の研究によって, 当時のソグド人の宗教性が判明する場合があることは以前に指摘した。例えば(何)祐所延は yyšw'y'n「イエスの恩恵」に対応すると考えられ, この名前を帯びた者はキリスト教徒かマニ教徒であったと考えられる[33]。これが現れる文書は唐の初期の高昌県の勘田簿[『文書』4/18-19]であるが, このことから当時のトルファン盆地にキリスト教徒ないしはマニ教徒のソグド人がいたことが推定される。

試みにトルファン出土文書で人名に仏陀を表す要素を持つものを集めてみると, 下記のようになる:

人名			出典[34]	時代
史浮呾潘	b'i̯əu	ti̯ẹ p'uân	6/494	665頃
何浮知	—	—	大谷1/11	691
何浮呾毘	—	— b'ji	大谷1/88	691
曹浮呾盆	—	— b'uən	7/216	696
石浮呾盆	—	— —	7/473	707
安浮呾壹	—	— ˈi̯ĕt	7/469	707
石浮呾満	—	— muân	7/474	707
安浮呾盆	—	— b'uən	8/23	713頃
康浮呾延	—	— i̯an	8/25	713頃
康浮呾蒲	—	— b'uo	大谷1/136	741
安浮呾延	—	— i̯ăn	大谷2/234	不明

後分の要素のすべてが解決されているわけではない。現在分かっているところでは潘は prn「栄光」に, 毘は βyrt「獲得された」, 延は y'n「恩恵」に対応する。興味深いのは, 仏陀を表す要素が基本的に同じ漢字の組み合わせで表現されていることで, ソグド人の人名の音写は, その都度場当たり的に行われたのではなく, 一定の方式があったことが推測される。

もうひとつ重要な点は, これらの人名がすべて唐の時代に属することである。現在までのところ, 唐以前の高昌時代のソグド人の人名に仏陀を表す要素が含まれた例を筆者は知らない。このことはソグド人が仏教徒となった時代について示唆を与えるものかもしれない。実

際，ソグド語の仏典はその内容と体裁の研究から，8世紀前半のものが大半と考えられており，そのこととよく符合する[35]。もちろん我々が目にしている資料はある意味では偶然残されたものであり，そこで見られる状況は必ずしもその時代の全体像を反映しているわけではないことも，念頭に置いておかなければならない。なお安浮呾延が現れる年代不明の文書は，この推定が正しければ唐の時代の文書ということになる。文書編纂者たちは高昌時代のものではないかとしているが，再考を要しよう。

ちなみに上で従化郷の羅伏帝延を取り上げ，そこにも仏陀を意味する要素伏帝が含まれていると推定した。従化郷には他に，(石)勃帝忿，(康)伏帝番，(康，何)伏帝忿が見える。同様に唐の高宗の陵墓である乾陵の，蕃臣像の中にある播仙城主の何伏帝延も仏陀を含む人名である。さらに下で見るように，コータン出土の790年の文書に(羅)勃帝分が現れるが，これも同類である。トルファン出土文書に見えるものとは，名前を表記する方法が異なるのは，時代及び地域の違いによるであろう。しかしこれらも唐代の文書に見える形式なので，ソグド人が仏教徒になった時代に関する上の推定と矛盾しない。

コータン出土文書中のソグド人

コータン出土の文献に現れるソグド人名を扱った関連で，コータン出土の漢文文書に現れるソグド人の人名を集めておく[36]。

名前		復元形	出典[37]	時代
野那	i̯a nâ	y'n'kk	M. T. b. 009/40 (p. 495)	721
康雲漢	ji̯uən xân	wnx'n	Mr. Tagh. 092/1 (p. 503)	唐代
石者羯	tśi̯a ki̯ɐt[38]	*c'kr	ibid.	唐代
安夫鎮	pi̯u t̂iĕn	?	Mr. Tagh. 0126/3 (p. 504)	唐代
羅勃帝芬	b'uət tiei pi̯uən[39]	pwtyprn	Mr. Tagh. 0634/1 (p. 507)	790
安芬	p'i̯uən	prn	Or 6407/10 (p. 539)	786

このうち野那には姓がないが，この同じ名前[『文書』7/94]あるいはその別の表記の也那(従化郷)，延那[『文書』7/93]，演那[『文書』7/351]はソグド人の人名として何度か現れており，これがソグド語の人名 y'n'kk を写したものであることには疑いがない[Yoshida, in Cadonna et al. (eds.) 1996 : 40, 75)]。姓がないのは奇妙だが，トルファン出土文書でも，石染典の奴隷は移多地のように姓を帯びておらず[『文書』9/41]，彼も同じような立場にあったのかもしれない。一方でコータン地区で出土した漢文文献に現れるコータン人の百姓はみんな姓を帯びていないので(例としては下記を参照せよ)，その習慣に従っているだけなのかもしれない。ここで注目されるのは，野那が現れるコータン某寺の支出簿(721-722年)によれば，彼は画匠であり，絵を描いて80文の報酬を得ていることである[40]。最近 M. Mode はコータン地区で発見される絵画にソグドの絵画の影響があることを指摘しているが，野那のようなソグド人の存在がその背景にあったのではないだろうか[Mode 1991/92]。

潮 (c'w)

かつて筆者はソグド語に導入された漢語の要素について扱ったが[吉田 1994 : 380-271], その後新たにもう1語漢語からソグド語に借用された要素を発見したので報告しておきたい。W. Sundermann が発表した10世紀頃のマニ教ソグド語の説話文献に, マニ教と大海を10の点で比較した話が見られる[Sundermann 1985]。そのたとえの一つは, 日に2度巨人が海で潮の満干を起こすように, マニ教の教会でも「教会の栄光」とも呼ばれるワフマンが光の要素を増やし, それを月と太陽を経由して光の世界に送るというものである。そのたとえで「潮」を表す言葉はマニ文字で c'w と表記されている。Sundermann はこの語に関する Gershevitch の説を採用している[I. Gershevitch, *apud* Sundermann 1985 : 44]。それによればソグド人は内陸アジアに住んでいて潮を知らなかった。潮の概念はペルシア湾を知っていたパルティア人から習い, 語も借用した。c'w はパルティア語の*j'w に由来し, それ自身は語根*gaw-「増える」から派生した語で,「増加」から「上げ潮」の意味に変化したと考えた。この語源は巧妙に考案されており, それ自体を批判することはできない。ただ想定された借用の背景にやや無理があることと, *j'w という語自体が在証されず, 形式も意味も全くの仮構であることは否定できない。従ってより強力な語源が提案されれば, Gershevitch の語源は廃棄されることになるであろう。

漢語の潮 d̂'i̯äu の発音がマニ文字で c'w と表記されるような音であったことは, 声母の有声(d̂')と無声(t̂')だけが異なる超 t̂'i̯äu がウイグル文字で c'w で表記されていることからも推定される[吉田 1994 : 351]。従ってソグド人は潮の概念と語を中国人から借用したと考えられる。さらに Sundermann が校訂したソグド文字で書かれたテキストにも, この同じ語が見えている。Sundermann はその箇所を誤解しているので, ここでそれも指摘しておくことにする。Sundermann はテキストの問題の箇所(115-117行)を次のように転写し翻訳している[Sundermann 1985 : 27]。

(115) . . . nwmykw xw z'(w) [rkyn] (116) ZY smwtry kwn'y ky ZY c'nw sxw'yt ZY 'nγt(y)

(117) sm'wtrw βn'wt xwty xcy δyny-prn ky ZY . . . "Neuntens : Der Star[ke] und *Dämon des Weltmeeres, der, wenn er emporhebt, das ganze Weltmeer erschüttert, das ist Nous der Religion . . . "

しかし上での議論を参考にすれば c'nw は c''w と読むべきことが分かる。また kwn'y は kw''y「巨人」と, βn'wt は βz'wt「増やす」と読むべきであることが別に指摘されており[41], 引用した部分は「・・・9番目 : 満ち潮を起こし, 全大海を増やす力強い大海の巨人はまさに教会の栄光(=ワフマン)そのものである。彼は・・・」と翻訳されるだろう。

普通名詞

漢字で表記されたソグド語の普通名詞で，現在まで比定が行われているのは次の通りである[42]：

叱撥 tś'i̯ĕt puât : cyrδp'δ「畜生(四つ足動物)」[Frye, *apud* Schafer 1963 : 295, n. 29.]

薩宝，薩保，薩甫 sât pâu : s'rtp'w「キャラバンのリーダー」[43]

拔 b'uât : 'pw'δ'k「社(宗教の建物)」[Schwartz, AoF 1, 1974 : 261]

破羅 p'uâ lâ : pr'kh「旗」[Henning 1965 : 253, n. 70]

者羯，赭羯，柘羯 tśi̯a ki̯ɐt : *c'kr「戦士(私設の護衛兵)[44]」

車鼻施 tś'i̯a b'ji śie̯ : cp'yš「司令官」[45]

地名の中にも，『大唐西域記』の笯赤建 nuo ts'iäk kian のように，nwcknδh「新しい城」に復元できるものがある。『唐書』巻221「西域伝」下の弩室羯 nuo śi̯ĕt ki̯ɐt も同じ地名に違いないが，*nwškt, nwškθ のように復元され，ソグド語としては遅い時期の特徴を示している。すなわち -ck- が -šk- になる変化や鼻音要素が鼻母音を経て消失する変化を経た後の形式である。ちなみに『沙州伊州志』の弩之城 nuo tśi や『寿昌県地鏡』の弩支城 nuo tśie̯ も nwc「新しい(女性形)」を表記している[46]。

伎曲名

これらとは別に，『隋書』巻15「音楽志」下には康国伎と安国伎の曲名が列挙されている。それらは，

康国伎(歌曲)：戢殿農和正 tsi̯əp d'ien nuong γuâ tśi̯ang

(舞曲)：賀蘭鉢鼻始 γâ lân puât b'ji śi

末奚波地 muât γiei puâ d'i

農恵鉢鼻始 nuong γiwei puât b'ji śi

前拔地恵地 dz'ien b'uât d'i γiwei d'i

安国伎(歌曲)：附薩単時 b'i̯u sât tân źi

(舞曲)：末奚 muât γiei

(解曲)：居和祇 ki̯wo γuâ tśi

である[47]。これらは音楽のタイトルであることから，分析不可能な固有名詞ではなく，いくつかの語の組み合わせであったに違いない。このうち賀蘭鉢鼻始は，γr'n ptβyš「重大な敬意」に還元できるのではないかと考えている。ベゼクリクで出土したソグド語の手紙に mzyx ptβyš「偉大な敬意」という表現がある。ptβyš は初出の語だが「敬意」の意味は文脈からほぼ確実である[48]。さらに附薩単時は *βw(δ)stncy「花園の」に還元できるかもしれない。ソグド語には βwδstn 以外に bwstn(キリスト教文献)という形式もあった[49]。後者は第2音節が短母音であることからも明らかなように，ペルシア語の būstān からの借用語ではない。また舞曲のタイトルであることから，末奚波地は *mrγy p'δ'k「鳥の足」に復元してみることができ

るだろうか。他のタイトルについては今のところ成案がない。

4 コータン語

コータン語文献に現れる漢語の要素については高田時雄に総合的な研究があり，ほとんどがそこに集められている[50]。それ以後に発見されたものとしては，ṣṣūkṣāhä＝守捉 śi̯ə̯u tṣo̊k がある。Bailey は正しくこの語が漢語に由来することを認識したが，その原語については確信がないまま「所属」を提案した[51]。しかしこの比定はとうてい受け入れられず，高田も採用していない。これが正しく比定されたことにより，従来から知られていた坎城（守捉）＝phęmāṃ（śūkṣuhina）が確認されただけでなく，それが現れる文献が当時の唐の守捉と地元の住民との関係を記録した文書であることが判明した点で重要である。

一方で，漢字で表記されたコータン語の固有名詞も相当存在するが，それらについての総合的な研究はまだなされていない。典籍史料にも登場する人名では，画家の（尉遲）乙僧 ʿi̯ĕt səng が，īrasaṃgä を写したものであることが明らかにされている［Bailey 1982：95］。コータン出土の文書に出てくる人名については，Hedin 文書のなかのコータン語と漢語のバイリンガルの文書のなかに，コータン人の人名を漢字で写したものがいくらか見つかり，Bailey はそれらを列挙している[52]。筆者も Hedin のコレクションのなかの永泰三年の紀年を持つ木簡に，勿日桑宜 mi̯uət ńźi̯ĕt sâng ngji̯ę という名前を読み，それをコータン語の人名 vaśa'rasaṃ-gä に比定したことがある[53]。

類似の資料は未発表ではあるが，サンクトペテルブルグの東洋学研究所が保管する漢文文献のなかにもある。それらは栄新江・張広達・熊本裕などによって現在研究されており，近い将来発表される予定である。筆者も別の経路で，それらの一部を研究する機会があった。ここではそのうちの1点の文書に現れる漢字で表記された人名について，筆者が気づいたことをまとめておきたい。

問題の文書（Dx 18928）は漢語とコータン語のバイリンガルの契約文書で，そこの保人のリストのなかにコータン語で rruhadattä と綴られる人名があり，他の保人と同様に，漢字とブラーフミー文字で表記してある。漢字の方は□羅捺 -lâ nât と読まれ，最初の漢字の読みは確定できない。捺が -dattä に当たることは，Bailey のリストにある蘇里捺＝suradattä などの例から明らかである。また suhadattä が娑捺と表記されることから，羅は rruha に対応することが推測される。ブラーフミー文字と漢字の表記に見られる発音の差異は，コータン語のほうが歴史的書記法で表記されていることに依るのだろう。従って羅捺だけで rruhadattä を表記するには十分であるはずである。それ故，羅に先行する要素は外国語の r- で始まる語を漢字で表記する際にしばしば見られる，入り渡りの音を表記する漢字であるに違いない。この見地でもう一度写本を見てみると，羅の前の漢字は紇 γət と読むのが妥当であると思われる。ちなみに『大唐西域記』では同じ機能で曷が用いられる（例：曷邏闍補羅 γât lâ źi̯a puo lâ

＝rājapura)[54]。

未だに解決できないのは，叱半の原語の問題である。この語はコータン出土の漢文文献に何度か現れ，文脈から徴税を担当する官職名であると考えられている。池田はコータン出土の漢文文書に現れる薩波と同じ語の音写で，コータン語の spāta に当たるとしている［池田 1996：219］。しかし漢字の発音の面からは，この比定は受け入れられない[55]。原語としては č(a)pan のような形式が想定されるが，そのような語は見つかっていない。筆者は最近になって発見されたコータン語の単語 chau-paṃ に相当するのではないか，と考えているが確信はない。この語は固有名詞に先行しており，一種の称号であったことが推定される。Emmerick は産物の名称だと考えているが，文脈は必ずしもそれ以外の解釈の可能性を排除しない[56]。音写の面では，第1音節の母音の音色を除いてはぴたりと対応する。漢字で外国語の発音を音写する場合，母音の音色まで正確に表記することは容易ではないので，このことはそれほど大きな問題にはならないだろう。

注

1） 榎一雄「歴史の顔をした作り話の横行」『朝日ジャーナル』1980, 5（2）：65-67参照。これに対しては伊藤先生の反論もある［『同誌』1980. 5, (30)：80-81］。

2） 中古漢語の再構形は Karlgren 1957から引用した。そこに登録されていない漢字は，彼のシステムに従って筆者が再構した。

3） 佐藤 1975：384参照。最近 N.Sims-Williams は，そこに見える波斯王からの手紙の冒頭の文言が，バビロニア以来の伝統に基づいていることを指摘している［Sims-Williams 1996：82］。

4） ちなみに marzbān「辺境侯」の音写「没似半」が，『新唐書』巻221「西域伝」下の波斯国之条に見える［Harmatta 1971：373］。

5） 『魏書』では地早とあるが誤りである。この形式は『周書』巻50「異域伝」下に見えるもので，そちらのほうが採用されるべきであることに関しては，Laufer 1919参照。

6） yazad の発音及び夷薩の原語に関しては，吉田 1986：11参照。

7） ササン朝の王の称号と，彼らが神と考えられていたことについては，Widengren 1965：314-315 with n. 13；Sundermann 1988：338-340参照。

8） このことを最初に指摘したのは Henning 1940：18である。

9） Cf. Horn 1895-1901：182. ユダヤ＝ペルシア語にもこの語尾は見られる［Henning 1958：80］。

10） 地名以外の固有名詞も報告されている。それらのうちもっとも興味深いものは，計多外道と穆那天であろう。「計多 kiei tâ 外道」を水谷真成は固有名詞と考えず，「外道の人が多く」と訳している［水谷 1971：371］。しかしバクトリア語の κεδο がこれに当たるとする Sims-Williams の説は正しいであろう［Sims-Williams 1996a：647, n. 21］。穆那の穆に対して，『大唐西域記』は2通りの読みを示している。ひとつは錫荀反（*siə̯u）もう一つは士句反（*dʑʻi̯u, dʑʻə̯u）である。この揺れはおそらく中国語に対応する発音の漢字がない状況で，2種類の近似値を与えていると考えられよう。原語の初頭音はバクトリア語の表記である ζονο，アラビア文字の zwn，漢字の表記を参考にして考えなければならな

いだろう。いずれにしても玄奘の表記をサンスクリットの śunā の音写と考えるのは不可能であり，水谷 1971：52の推定は撤回されなければならないであろう。

11) 水谷 1971：43；桑山1990：60(見開き地図)参照。季羨林 1985：128は，Pelliot の説に言及して，Gaz と掲職とでは発音が合わないとしている。Pelliot は漢字音は karčik あるいは kačik のような発音を写すと考えているというが，彼は掲の声母として k- あるいは k'- を想定したのだろう。掲には確かにこの発音もあった。

12) Cf. Sims-Williams 1996：645, n. 12；idem 1997：16 with n. 27. Gharchistan の語源に関しては Bailey 1982：90も基本的に同じ説を発表している。

13) 桑山 1986：145；桑山 1987：266-268参照。しかし榎一雄は阿緩城をクンドゥズ付近に，活＝活路をスルハーブの中流域の Ghūr に比定する[榎 1992：415-417]。

14) 桑山 1992：146参照。なお Ārhan の位置については，桑山 1987：269参照。

15) なおこの関連で，縛帝野 b'i̯wak tiei i̯a についての筆者の注釈[桑山 1986：150-152]を補足しておきたい。縛帝野という地名は『酉陽雑俎』巻14にも現れる。そこでは「吐火羅国縛帝野」とあり，ここでも吐火羅国にあったことが記されている。興味深いのはここに城を築いた王として，波斯王烏瑟多習 'uo si̯et tâ zi̯əp が言及されていることである。これは Wištāsp の音写に違いなく，ゾロアスター教の伝統で，バクトリアを建設したとされる Lohrāsp が Wištāsp の父親であったことが想起される[*En. Ir.* 3 (4)：344]。このことは縛帝野がバルフであったとする説を支持するように見える。しかしこの点についてはなお検討を要しよう。

筆者は上掲の注釈で『魏書』の薄提がアヴェスタ語のバクトリアを意味する bāxδī に当たるとしたが，ここでその考えを撤回する。アヴェスタ語の形式は非常に古いもので，『魏書』の時代にこの発音が残っていたとは考えられないからである。薄提は縛帝野などと同じ形式を意図したものに違いないが，原語はいまだに不明である。ただしムグ文書に見えるソグド語の地名(あるいは地名から派生した形容詞) βγtyk 及びコインの銘文に現れるバクトリア語の形容詞 βαγδαιγγο は同じ語源の語であろう。前者については吉田 apud 桑山 1992：166を，後者に関しては Davary 1982：100, 170-171を参照されたい。

16) Cf. Sims-Williams 1996a：647, n. 18.

17) 池田 1965：61 n. 31参照。この点に関しては池田 1979：124に引用された文献も参考になる。そこでは僧侶の羅文成の本貫が土火羅国(ママ)とある。

18) 二人の人名はどちらも『文書』7/93に見える。

19) 敦煌従化郷の差科簿(P3559)の人名は，池田 1965に収録されたものを引用する。

20) Weber 1972：201参照。ちなみに伏には b'i̯uk の発音もあり，池田も Weber もこちらの音を採用している。しかし pwt(y) [but(i)] の音写であることを考慮すれば，b'i̯əu の音の方が採用されるべきである。ソグド人の人名の項で論じる浮 b'i̯əu も参照せよ。

21) 池田 1979：383参照。拂延はアヴェスタの Friiāna と同じ語源の人名だろうか[Sims-Williams 1992：65]。

22) Cf. Sims-Williams 1992：67. 池田[1965：64]は磨娑 muâ sâ を mwš'kk と比較しているが，漢字音の面から無理がある。従化郷の差科簿で勿が m(ut) の音写に使われることは，安射勿盤陀 dź'i̯a mi̯uət

b'uân d'â が, *žymtβntk の音写であることからも知られる[Yoshida, *BSOAS* 57(1994) : 391]。

23) Mahrnāmag (=M1) は Müller 1912で見ることができる。そこの108行目の l'frn に関しては Sims-Williams 1996b : 58も参照せよ。

24) Cf. Sims-Williams 1992 : 77. ニヤ出土のカローシュティー文書にも mareǵa を含む人名は現れる[A. Mariq, *JA* 246(1958) : 367]。

25) コレズム語にも人名要素として frn は使われ, 漢字で音写された例がある。『新唐書』巻221「西域伝」下, 火尋国の項に天宝十載に朝貢してきたとされる稍施芬は, コレズムのコインに現れた š'wšprn その人であることが知られている[Henning 1958 : 57]。

26) ムグ文書には暦の日の名前として δtš が現れる。これが歴史的書記法でなく, 実際の発音に対応しているならば, 達数はその形式の音写なのかもしれない。

27) δšcy'pt, etc.に関しては Yoshida 1991 : 242-243参照。『沙州図経』は池田 1975 : 31-101を利用した。

28) Cf. Livšic and Lukonin, *Vestnik drevnej istorii* 89(1964) : 173. ただし彼らの読み δyγcy は, δyšcy と改めなければならない。

29) 'βy'mn を含む人名及びその語源に関しては Sims-Williams 1992 : 40参照。漢字で表記された人名は Yoshida 1991 : 239参照。

30) 敦煌及びトルファン出土資料中のものは蔡 1992 : 121によって集められた。典籍資料にも康阿禄山が現れる[向 1933 : 16]。

31) 池田 1965 : 63は, これを rwxšn の音写と考えるが, 漢字音の面からは無理がある。

32) Henning の考えは Pulleyblank の論文[*T'oung Pao* 41(1952) : 333, n. 1]に引用されている。波注に関しては ibid. 参照。p'c 及びその音写と見られる(石)破遮[『文書』8 /25]については, Yoshida, *BSOAS* 57/2(1994) : 391を参照せよ。

33) 吉田 1989 : 71参照。yyšw'y'n は Mahrnāmag, l.96に現れる。同じ名前は未発表の文書 Ch/U 6225 verso に 'yšwy'[n]として在証される。漢文仏典の欄外に落書き的に書かれているという状況から判断して, これもマニ教徒の人名である。

34) 6 /494等は『文書』6 /494を示す。大谷 1 , 2 は『大谷文書集成』壹, 貳(京都 1984-1990)の略号である。

35) ソグド語仏典の年代に関しては, 吉田 1991 : 101-103参照。

36) コータン語文献にも, ブラーフミー文字で表記したソグド人の人名が現れる。それについては Yoshida, *BSOAS* 60(1997) : 569参照。

37) これらの文書はすべて陳 1995 : 480-562に収録されている。

38) この名前を郭鋒 1993 : 51は, 都督と読んでいるが, ここでは栄新江の読みを採用した陳国燦の読みに従った。*c'kr の原語のついては下記の注釈を参照せよ。

39) この名前を最初に復元したのは荒川正晴[『龍谷史壇』103/104(1994) : 32]である。

40) この人名が現われる支出簿の年代は, 池田 1996によって明らかにされた。

41) Cf. Sims-Williams 1992 : 54. βz'wt の読みは, Sims-Williams 教授のもので, 口頭で教示を受けた。

42) 中世ペルシア語からソグド語に借用された語がさらに漢語に入った例である, 蜜=myr などの曜日の名前はここには含めなかった。漢字で表記された曜日の名前については吉田 1994 : 299-300も参

照せよ。

43) 吉田 1988 : 168-171参照。最近になって,唐と唐以前の薩宝の性格の違いについて重要な論考が発表された[荒川 1997]。

44) *c'kr はソグド語文書に在証されない。ペルシア語に借用された chākar から復元した。中央アジアにおける chākar の制度には,Beckwith 1984 : 29-43が参考になる。

ちなみにソグド語で兵士を意味する言葉は "ztk'r である。これはその前分の "zt「自由な」から判断できるとおり,自由人の兵士すなわち騎士を指した語であったと考えられる。chākar は非自由人であったことが知られており,一種の用心棒であった彼らがソグド語の文献に現れないのはある程度理解できる。サマルカンドの壁画に見えるサマルカンド王の宮廷には,多数の突厥人が描かれているが,彼らはソグド王の chākar であった可能性が最近になって指摘されている。影山[印刷中]参照。

45) 陳 1980 : 196。陳は cp'yš をトルコ語と考えているようだが,リフシツはソグド語文献に在証されるので,ソグド語からトルコ語に借用された形式であると考えている[Livšic 1962 : 88]。今はこの説に従う。最近 Sundermann 1997 : 140は,トルコ語起源を前提にして,議論を進めている。

46) ここで論じた二次的な音韻変化については,Gershevitch 1954 : §§ 259, 340参照。nwc を復元することに関しては Sims-Williams 1996 b : 61, n. 75参照。

47) 中谷 1996。なお岸辺[1982 : 110]は,戢殿農和正を戢殿と農和正の 2 曲と解釈している。

48) この手紙に関する研究は,吐魯番地区文物局(編)(印刷中)に収められている。

49) Cf. Sims-Williams 1985 : 208. この形式はウイグル語にも借用されたらしい。βwsδ'n という語が遅い時期の文献に見える(庄垣内 1982 : 70の yusdan はおそらく誤読である)。初頭の子音は正しくこれがソグド語からの借用語であることを示している。

50) 高田 1988 : 71-128。いくつかの語が登録されていない。それらの中では,兵馬使 peṃ ba'ṣi ; 抄 kṣau ; 升 śiṃga, ṣaṃga などは重要である。

51) Cf. Yoshida, *BSOAS* 60(1997) : 568. なお Bailey の説は,Bailey 1961 : 160に見える。

52) Cf. Bailey 1961 : 173-178. 下でも論じるように,そこに見られる人名の最後の要素の捺はすべて捺と読まなければならない。

53) Cf. Yoshida, *BSOAS* 60(1997) : 568. この人名が比定できたことによって,同じ人名を含むコータン語の世俗文献のおおよその年代が推定できる。

54) 紇を外国語の初頭の r- に先行する入りわたりの音を写す例に関しては,水谷 1971 : 38参照。ちなみに漢訳マニ教文献に見られる音写語でも類似の現象が確認されるが,そこでは入りわたりを表記する漢字は影母の漢字である。例えばパルティア語の rāštīft の音写は阿羅所底弗哆であるのに対して,rōšn のそれは鳴嘘詵である。吉田 1986 : 折り込み表 Nos. 72-76参照。

55) 叱半を spāta の音写とみることには,関尾[1997 : 198, n. 17]も否定的である。

56) chau-paṃ に関しては,Emmerick and Vorob'ëva-Desjatovskaja 1995 : 155参照。

参考文献

En. Ir. : E. Yarshater (ed.) *Encyclopaedia Iranica.* New York. 1982〜.

『文書』：国家文物局古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系編『吐魯番出土文書』1～10, 文物出版社, 1981～1991.

Bailey, H. W. (1961) *Khotanese texts* IV. Cambridge.

Bailey, H. W. (1982) *The culture of the Sakas in Ancient Iranian Khotan.* New York.

Beckwith, C. I. (1984) Aspects of the early history of the Central Asian guard corps in Islam. *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 4, 29-43.

Cadonna, A. et al. (eds.) (1996) *Cina e Iran.* Florence.

Daffina, P. (1983) La Persia sassanide secondo le fonti cinesi. *RSO* 57, 121-170.

Davary, G. D. (1982) *Baktrisch. Ein Wörterbuch.* Heidelberg.

Emmerick, R. E. & M. I. Vorob'ëva-Desjatovskaja (1995) *Saka documents. Text volume III. The St. Petersburg collections.* London.

Gershevitch, I. (1954) *Grammar of Manichean Sogdian.* Oxford.

Harmatta, J. (1971) The Middle Persian-Chinese bilingual inscription from Hsian and the Chinese-Sasanian relations. *Atti del Convegno Internazionale sul tema "La Persia nel Medioevo".* Rome, 363-376.

Henning, W. B. (1940) *Sogdica.* London.

Henning, W. B. (1958) Mitteliranisch. *Linguistik.* Hdb. d. Or. 1/4 (1). Leiden-Köln. 20-130.

Henning, W. B. (1960) The Bactrian inscription. *BSOAS* 23, 47-55.

Henning, W. B. (1965) Sogdian god. *BSOAS* 28, 242-254.

Hinz, W. (1975) *Altiranisches Sprachgut der Nebenüberlieferungen.* Wiesbaden.

Horn, P. (1895-1901) Neupersische Schriftsprache. *Grundriß der iranischen Philologie.* I, 2. Abtl. Strassburg, reprint Berlin, 1974, 1-200.

Justi, F. (1895) *Iranisches Namenbuch.* Marburg, reprint Hildesheim, 1963.

Karlgren, B. (1957) *Grammata Serica Recensa.* Stokholm.

Laufer, B. (1919) *Sino-Iranica. Chinese contribution to the history of civilization in Ancient Iran, with special refernce to the history of cultivated plants and products.* Field Museum of Natural History, Publication 201, Anthropological Series 15 (3). Chicago, reperint Taipei, 1973.

Livšic, V. A. (1962) *Sogdijskie dokumety s gory Mug.* 2, Moscow.

Lukonin, V. G. (1983) Political and administrative institutions. Taxes and trade. *The Cambridge history of Iran* 3 (2). Cambridge, 681-746.

Marshak, B. I. (1995/96) On the iconography of ossuaries from Biya-Naiman. *Silk Road art and archaeology* 4, 299-321.

Mode, M. (1991/92) Sogdian gods in exile — Some iconographic evidence from Khotan in the light of recently excavated material from Sogdiana. *Silk Road art and archaeology* 2, 179-214.

Müller, F. W. K. (1912) *Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Mahrnāmag).* APAW.

Pulleyblank, E. G. (1955) *The background of the rebellion of An Lu-shan.* London.

Schafer, E. H. (1963) *The golden peaches of Samarkand.* Berkeley.

Sims-Williams, N. (1985) *The Christian Sogdian manuscript C2.* Berlin.

Sims-Williams, N. (1992) *Upper Indus II.* London.

Sims-Williams, N. (1996) From Babylon to China. Astrological and epistolary formulae across two millenia. *La Persia e l'Asia Centrale da Alessandro al x secolo.* Rome, Academia Nazionale dei Lincei, 77-84.

Sims-Williams, N. (1996a) Nouveaux documents sur l'histoire et la langue de la Bactriane. *Comptes rendus de l'Academie des Inscriptions et Belles-Lettres.* Avril-Juin, 633-654.

Sims-Williams, N. (1996b) The Sogdian merchants in China and India. In : Cadonna et al. (eds.) (1996), 77-84.

Sims-Williams, N. (1997) *New light on ancient Afghanistan. The decipherment of Bactrian* (An inaugural lecture delivered on 1 February 1996). London.

Skjaervø, P. O. (1991) Iranian words in Chinese texts. *En. Ir.* 5(5), 449-452.

Sundermann, W. (1985) *Ein manichäisch-soghdisches Parabelbuch.* BTT XV. Berlin.

Sundermann, W. (1988) Kē čihr az yazdān. Zur Titulatur der Sasanidenkönig. *Archív Orientální* 56/4, 338-340.

Sundermann, W. (1997) *Der Sermon von der Seele.* BTT XIX. Berlin.

Weber, D. (1972) Zur sogdischen Personennamengebung. *IF* 77, 192-208.

Widengren, G. (1965) *Die Religionen Irans.* Stuttgart.

Yoshida, Y. (1991) Sogdian miscellany Ⅲ. In : R. E. Emmerick and D. Weber (eds.), *Corolla Iranica.* Frankfurt am Main, 237-244

荒川正晴(1997) 北朝隋・唐代における「薩宝」の性格をめぐって『東洋史苑』50・51.

池田 温(1965) 8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落『ユーラシア文化研究』49-92.

池田 温(1975) 沙州図経略考『榎博士還暦記念東洋史論叢』東京, 31-101.

池田 温(1979)『中国古代籍帳研究』東京.

池田 温(1996) 麻札塔格出土盛唐寺院支出簿小考『段文傑敦煌研究五十年紀念文集』北京, 207-225.

榎 一雄(1992)『榎一雄全集』1, 東京.

郭 鋒(1993)『甘粛新疆出土漢文文書』甘粛人民出版社.

影山悦子(印刷中) サマルカンド壁画に見られる中国絵画の要素について——朝鮮人使節はワルフマーン王のもとを訪れたか—『西南アジア研究』49.

岸辺茂雄(1982)『古代シルクロードの音楽』東京.

季羨林等(校注)(1985)『大唐西域記校注』北京.

桑山正進(1986) トハーリスターンのエフタル, テュルクとその城邑『三笠宮殿下古稀記念オリエント学論集』東京, 140-154.

桑山正進(訳注)(1987)『大唐西域記』(大乗仏典 9) 東京.

桑山正進(1990)『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都.

桑山正進(編)(1992)『慧超往五天竺国伝研究』京都.

向 達(1933)『唐代長安与西域文明』北京.

蔡　鴻生(1992) 唐代九姓胡礼俗叢考『文史』35, 109-125.

佐藤圭四郎(1975) 北魏時代における東西交渉 松田寿夫博士古稀記念出版委員会(編)『東西文化交流史』東京, 378-393.

シムズ＝ウイリアムズ, N.(1997) 古代アフガニスタンにおける新知見『ORIENTE』(古代オリエント博物館情報誌)16, 3-17.

庄垣内正弘(1982)『ウイグル語・ウイグル語文献の研究』1, 神戸.

関尾史郎(1997) コータン出土唐代税制関係文書小考『平田耿二教授還暦記念論文集：歴史における史料の発見』東京, 179-204.

高田時雄(1988) コータン文書中の漢語語彙『漢語史の諸問題』京都, 71-128.

陳国　燦(1980) 唐乾陵石人像及其街名的研究『文物集刊』2, 189-203.

陳国　燦(1995)『斯坦因所蒐吐魯番文書研究』武漢.

吐魯番地区文物局(編)(印刷中)『吐魯番新出摩尼教書信文献及有関問題研究』

中谷実邦子(1996) イスラム化以前の中央アジアの音楽文化――ソグドの楽器と音楽から――(平成7年度神戸市外国語大学修士論文).

水谷真成(訳注)(1971)『大唐西域記』東京.

吉田　豊(1986) 漢訳マニ教文献における漢字音写された中世イラン語について(上)『内陸アジア言語の研究』2, 1-15.

吉田　豊(1988) ソグド語雑録(Ⅱ)『オリエント』31, 165-176.

吉田　豊(1989) ソグド語の人名を再構する『三省堂ぶっくれっと』78, 66-71.

吉田　豊(1991) ソグド語仏典解説『内陸アジア言語の研究』7, 95-119.

吉田　豊(1994) ソグド文字で表記された漢字音『東方学報　京都』66, 380-271.

(神戸市外国語大学)